

云いんとするも花のがま
風ひきませせなやよ子よと
妾がかたえに纏ひつゝ
今猶聞きつる心地して
海より深き御身の恩

下

御身を恨むにわらねども
兎や角思ひめぐらせは
御身の御心いかにとも
愛の母君母君と
ゆられくゝてあの空の
昔に聞きしあの聲を
問ひ来てませややよ君よ
學の道も誰が爲に
いざ今日よりは徒に

雪の夕や霜の朝
御身の着ませる御衣を
おほせ玉ひし言の葉に
山より高き御身の恩
いかでか是を忘るべき

來ん年月や越し方を
胸板さけん心地して
妾はもとのまゝにして
磯うつ浪によぶ子鳥
君ぞ戀しと眺むれば
今一度だに心あらば
是ぞ此世の希望なる
誰が樂みはたどるらむ
消なん命をまつばかり

落る涙やよふ聲や
學の庭を何處にしつ
岸のあたりをそこはかと
晝はひねもす夜もすから
千々の思にやせはて、
涙に劣る玉川の
慣れし小笹を友として
狂ひてありく少女あり

花見

東くめ子

花見ごろもを
よそほひなせる
花と色をは
都大路を
身にあらたへの
わりごさげつゝ
まことに花を
うるはしく
をとめらよ
さほはんと
ねりゆくや
布子きて
ゆく子らぞ
めづるらん

踐たなびく

野にやまに

朽ちせぬ花

つねを

善の報いに

名もなくて

世にまつろはぬ

すね人に

ふもはぬ幸の

花さきて

譽れの實のる

ためしあり

よしや生れし

人のよの

譏りありとも

まごころの

よきとあしきは

幾千代に

朽ちせぬはなと

にははまし

海

竹柏會同人

伊藤梅子

わたつみの千ひろの底にかつき入りて

世のなりはひとあはびとるなり

樺山常子

かぎりなき青海原をとぶ鳥の

翅やすむる帆ばしらの上

服部しげ子

久方のあめのぬぼこのしたたりや

大海原のはじめなりけん

佐藤朝恵子

櫻島とほくかすみて真帆かた帆

かぞへもあへぬ浪のうへかな

宮本より江

智の鍵に探るとすれど極みなさ

海のみ神のみ幸をぞ思ふ

大竹伊勢子

のぞみおほき人のこゝろはうなげらの